

寺田寅彦没後 80年 特集

アンケート「私の好きな寅彦の随筆」結果報告

本年 2015 年は、寺田寅彦が亡くなり 80 年の節目の年にあたります。

寺田寅彦は昭和 10 年（1935）12 月 31 日、58 年の生涯を閉じました。彼の残したものを集めた全集（昭和 60 年版）は文学篇 18 巻、科学篇 6 巻にも及びます。更に画集まで作られています。こうした作品は今も読み継がれ、多くの読者をもっていることは言うまでもありません。

この節目の年に当たり、昨年会員全員に対して、「私の好きな寅彦の随筆」というアンケートを行いました。長い歴史のある「榭」において、このような会員全員に対するアンケートの企画は初めてであります。これには、「榭」を会員全員参加の会報にしたいという願いもありました。幸い 40 名の会員から回答をいただくことができました。回答には会員一人ひとりの寅彦への熱い思いが込められており、短い文章ですが、読み応えのあるものばかりです。

会員の好きな寺田寅彦作品

(上位)

1	団栗	9 名
2	柿の種	3 名
3	天災と国防	2 名
3	科学者とあたま	2 名
3	花物語	2 名
3	龍舌蘭	2 名
3	初旅	2 名

40 名の会員が上げた作品名を集計してみると、上位は左のようになりました。

飛びぬけて多くの会員が上げた作品は「団栗」でした。

この作品は明治 38 年（1905）4 月 1 日発行の「ホトトギス」に発表されたものです。そのとき、寅彦は 26 歳です。漱石はこの作品を高く評価をしたといえます。まさに、これは、寅彦初期作品の名作と言っていいでしょう。

「寅彦の作品の中からひとつを選ぶのは非常に難しい」と書かれた会員がみえました。その通りだと思います。回答をされた会員は皆、悩み、苦しみ一つに絞られたことと思います。そこに大いなる価値があるのではないのでしょうか。これを機会に、好きな作品への思いを十分に書かれて「榭」に投稿されてはいかがでしょうか。お待ちしております。また、今回の回答を参考に、寅彦作品の再読をお勧めしたいと思います。

高知県立文学館の永橋禎子さんは、回答を全てお読みくださり、感想を書いてくださいました。厚くお礼申し上げます。

回答をいただいた作品名は、寺田寅彦全集に基づき、変更をさせていただいたものがあります。ご了承ください。

(編集部)

私の好きな寺田寅彦の随筆 ベスト・ワン

『雨の音』（ローマ字文）

寅彦の随筆を読むと頭の中が透明になったような感覚を覚える。頭がクリアになるこの感じ、何かしら自分の頭が少し良くなったように錯覚してしまうこの感覚を味わうことが寅彦の文章を読むことの魅力のひとつだと思うが、中でもこの『雨の音』を読むときそれを顕著に感じる。「雨の音」の物理的特徴を「過ぎ去った歴史の余響」に結びつける透徹な文章が、そう感じさせるのであろうか。心を落ち着けたいときについて読みたくなる透明感溢れる随筆である。

高知 野村 学

『映画雑感』

古い話ですが、これを読んでいましたので、戦後、フランス映画が再上映された時、観て楽しんだことを思い出します。

愛知 竹内 嘉子

『柿の種』（大震災の二日前に…）

好きというより印象の強いもの。昭和4年(1929)の作、関東大震災の記憶がまだ明確な頃、共に罹災した猫からの連想というものも特別ですが、その中に『『原子爆弾』と称する恐るべき利器…』とあるのです。広島悲劇の16年前です。アインシュタインが $E=mc^2$ の法則を発表した時(1907)から人類の意識が始まったのですが、前年に書かれた英語のSF小説にだけあったその言葉を使った、寅彦の関心の広さに改めて感銘します。

滋賀 武田 和忠

気になる『柿の種』

岩波文庫(2014年4月24日発行)の短章その一は、「棄てた一粒の柿の種 生える

察では土のよしあしよりも、柿が鳥に食べられたのちに実が糞と一緒に畑に落ちれば必ず生えます。問題は柿の実が鳥の体内を通過したかどうかです。柿の親木は自分より離れた所で子孫に成長してほしいと願っている様です。ツバキの実は親木のそばでも成長しますが。

熊本 百崎 末雄

『柿の種』（初出は俳誌「渋柿」(無題))

この中の一つに、歴史的な事件のきっかけにもなった事件のことが淡々と書かれている。寅彦さんの一族にとっては悲しいことだったはずだが、ありのままを書いているだけでその悲惨さがストレートに伝わってくる。この人の描写の特徴を一番表している文章のように思えるので、私のベスト・ワンである。

高知 田村 倫子

『金米糖』（「備忘録」の中）

寅彦の多数の随筆の中からベストワンを選ぶことは非常に難しい。ここでは物理学のその後の発展を見事に予言したという見地から表題の随筆を選んだ。

金米糖の一つの粒は、その周囲に砂糖を凝固して成長する。この過程においてなぜ特定の方向に角を出すかを問題にして、次のように結論付けている。「…金米糖の生成に関する物理学的研究は、その根本において、将来、物理学全般にわたっての基礎問題として重要あるべきあるものに、必然に本質的に関連してくるものと言ってもよい」。この予言はその後、南部陽一郎による「対称性の自発的破れ」となって実現し、2008年度のノーベル賞の対象となったことは記憶に新しい。

高知 岩崎 正春

『鎖骨』

文頭と文末は特に大切だと思う。『鎖骨』は、体験から始まり天然自然の治療法で結んでいる。精神の怪我でも天然の妙機があって、人工的に幫助することで楽に治療できるかも知れない等と書き進めている。

「鎖骨」は安全弁の役目で折れ易くできている。「人間の体も寝れば治るが無理をすれば肺炎等重症化する」と。自分が今その無理をした形に当たっているので苦笑しつつ百年近い前の名文に学んだのである。感謝。

高知 永野 美智子

『札幌まで』

昭和7年秋に札幌を訪れた寅彦の感想は「北海道では今でもまだ人間と動植物が生存競争をやっている勝負はまだ付いていないということは札幌市内の外郭を廻っても分かる」と言うものだった。月寒種羊場に立つ寅彦の写真の背景は今日札幌ドームを始めマンションの群れが押し寄せて一変した。しかし今年も札幌市内でさえ熊の目撃情報が相次ぎエゾシカによる農作物被害が増えているのをみると未だ戦いの最中なのかもしれないと思う。

北海道 吉田 達郎

『重兵衛さんの一家』

重兵衛さん、楠さん、亀さんが皆、魅力的。さらに重兵衛さんのおとぎ話が面白い（中でもすずめを捕る話は最高）

一番の理由は、寅彦の幸せな幼少時代を感じることができるから。そして、それに伴って、自分の子供の頃の楽しかった記憶を思い出させてくれるから、だと思います。

新潟 佐藤 妙子

『徒然草の鑑賞』

吉村冬彦の時代、蛍光板の中に書物と人のシリーズとして『徒然草の鑑賞』がある。科学者の目と文学者、哲学者の心をも感じさせられていた。徒然草第三十九段は兼好の法然上人が教えた念仏のあるべき姿その伝聞なのだが宗教、信仰の本質をさらりと書きとめている。あの段を冬彦さんも同じ思いで読んでいたかと感動していた。私は高齢になってやっと真意が解ってきたように思われる。

滋賀 安部 亮介

『田丸先生の追憶』

齢80を過ぎて私も寅彦と岩手を結ぶ新しい話題は無いものかと気にかゝる。かつて田中館愛橘、田丸卓郎、寺田寅彦を堅く結んだローマ字運動は、心強いとても嬉しい業績で、田丸の「ローマ字国字論」に象徴されるこの運動の基本理念は、私には現在でも納得される所が多い。このような中で寅彦の『田丸先生の追憶』は、ほのぼのとした二人の師弟愛に触れることが出来て、何度読んでも心が暖まるのである。

岩手 千葉 明

『天災と国防』

『天災と国防』の中にある下記の言葉が特別に印象に残る。文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である。この作品が書かれてから80年以上が経過している。残念ながらここに言われていることはそのまま現代に通じる。又その被害たるや当時の比ではないだろうと思う。近いうちに起るであろう地震その他の自然災害に対する日頃の警告の書としてこの作品をあげる。

神奈川 太田 文夫

『天災と国防』

寺田寅彦の随筆には、先見の明に驚くものが多い。科学者として客観的な分析の結果でもあるが、この随筆は特に、普遍的・現代的意義を端的にあらわしており、地学の教員として、生徒たちと自然災害を学ぶ時に活用している文の一つです。阪神・淡路大震災や東日本大震災など地震・津波に限らず、様々な自然災害が繰り返されているが、当時なかった「原発」の存在とその事故を見たとき、寺田寅彦はどのような文章を書くのだろうか。

高知 谷内 康浩

『電車の混雑について』

昔、戦中から戦後にかけての大学生の頃、札幌の市電を利用していた時、なかなか来ない電車がやって来ると、満員である。降りる人が少なく、乗る人は押し合いながら僅かで、乗れない人がでてくる。私も乗れないでいると、意外に次の電車が早くくる。しかも割と空いている。

寅彦の『電車の混雑について』を拝読して、我が意を得たりの思いであった。そして、その現象を科学的に解析されるすばらしさに敬服した。

高知 梅澤 俊一

『どんぐり』

好きな理由を問われても、何と答えていいのか困惑するばかりですが、“どんぐり”に始まって、“どんぐり”に終る、というような気が致しております。謎めいた最後の一文の意味するところを、敢えて詮索したいとも思いません。しもゆきこさんの版画入り“どんぐり”（ピーマンハウス、1996年）を時々本棚から取りだしては、郷愁に似た思いに浸っております。

北海道 田原 哲士

『団栗』

やはり寺田寅彦の代表作であり、一番最初に寅彦を知った随筆です。何ととっても、静謐な印象が深く心に残ります。何度読んでも深い余韻を残します。年に1度は観たくなる小津安二郎の映画のように。

つい最近黒澤明監督がこの随筆を読み、ある映画の省略の参考にしたとのを知りました。とにかく永遠の名作です。

高知 堀内 恭

『団栗』

どんぐりの“みつ坊”は伯母貞子である。寅彦の願ったみつ坊の幸せ。夫を早く亡くし苦労も多かった伯母だが、ゆったりと穏やかな優しい笑顔を思うと博芳という才能豊かな息子にも恵まれ幸せだったと思う。そして4歳で母雪子と別れた私にとってこの作品は特別思いが深い。21歳で私を生み25歳で結核の為亡くなった母。紆余曲折の末、結婚した妻を失った父も遺された私の哀れを思い途方にくれたようだ。寅彦と父の思いが重なる。

千葉 志村 くみ子

『団栗』

寅彦と同郷の安岡章太郎は『団栗』を随筆というより小説である、と評している。寅彦の随筆には他にもフィクションと思えるものもあるが、私もそう思っている。私がこれを読んだのは、ずい分若い頃であるが、起承転結の転の部分のインパクトが強い印象として残っている。つまり「団栗を拾って喜んだ妻も今はない」の行である。そして結の「始めと終わりの悲惨であった母の運命だけは、この児に繰り返させたくないものだ」の行間を読むと興味深い。

千葉 高橋 敏夫

『団栗』

欲得などを全く考えない 27 歳頃の作品であり、19 歳で早生した妻夏子を偲んだ私小説的ところが特に惹かれる。これは皇后美智子様も心を動かされた由である。

静岡 佐藤 邦夫

『団栗』

人は誰でも悲しみを背負って生きている。寅彦の悲しみは私の何倍もの大きさであったに違いない。

若くして、幼子を残し逝ってしまった妻を思う寅彦の悲しみは、いかばかりであろう。

『団栗』はフィクションがあるとかいわれるが、読むたび私の心は寅彦を思い深い悲しみにおそわれる。歳を取った近年は、その思いが一層強く心に共振するのである。

愛知 山田 功

『どんぐり』

団栗を拾い来てまた冬彦集

これは私の長兄の生前の句です。

書齋には寅彦の多くの本があり、子供の頃から沢山読みました。中でも初期の作品、特に『どんぐり』が好きです。

年末年始になると、書かれた情景を思い浮かべます。植物園を訪れたこともあります。文末の数行は奥様や子供への情感にあふれ、何度も読んだほど好きです。

寅彦と長兄と私は『どんぐり』で結ばれているのです。

兵庫 千葉 徹

『団栗』

団栗を拾って喜んだ妻も今はない。御墓の土には苔の花が何遍か咲いた。山には団栗も落ちれば鶉の啼く音に落葉が降る。若くして亡くなった妻の夏子さんとの思い出、

離れて暮らさなければならぬ悲しい病いと、戦いが訪れる事も考えたくない。新しい生命が宿っていた。暖かな一日植物園へ初めて出掛ける。ハンカチ一杯に拾って喜んだ妻の気持を考えれば涙があふれる。我子を育てることの出来ない悲しい妻夏子さんのお話です。

高知 伊東 喜代子

『団栗』

昭和 16 年師範学校予科 2 年の時私は図書館の中で、寺田の随筆『団栗』を手にした。「利口などんぐりちゃん」と云う娘の「みつ坊」を見て、亡妻の不幸な運命だけはいくら返させないと思う場面は、私の心にも根付いていた。彼の作品には静かな余情と孤独な感があり自分も同じだと感じていた。

昭和 62 年 8 月に小石川植物園に行き、どんぐりの場所を思っさまようなど、寅彦の自由な生を思い、彼の物理学の魅力はロマンにあると思った。

高知 田中 順一郎

『蜂が団子をこしらえる話』

昭和 11 年（1936）に中学に入った。そのときの国語の教科書にこの『蜂が団子をつくる話』が載っていた。これは大変に面白かった。筆者の名前には関心もなく覚えてもない。それから 10 年も経て図書館で寅彦全集を見たときに、これが寅彦の作品であることに初めて気がついた。教科書に載ったものは表題も一部違うし内容も縮小されていたようだ。これが寅彦との初対面だった。

岩手 吉田 稔

『初旅』

『初旅』は、寅彦が中学時代に、同じ年頃の親戚と 2 人で、高知から室戸まで初め

ての旅をした時の思い出を綴った随筆である。文中に出てくる野市・室津・東寺・行当岬といった場所は、私もかつて遍路で歩いたことがあり、制帽に袴、綿入れ羽織に身を包んだ青春時代の寅彦が、同じ道を歩いていたと思うと感慨深い。行間からは、岬の潮の香りや船溜まりの風景・古い宿屋の風情などが立ちのぼり、心は土佐の海辺に誘われるのである。

東京 木野村 由季

『物理学圏外の物理的現象』

どの作品を読んでも面白く、趣があって好きです。日常にある不可解な疑念について整理された数々の作品は、「真」の追求をつらぬいて、その姿勢は時として自身の論考への懐疑も表明され柔軟で誠実です。一つを選ぶのは難しいですが、私自身が学生時代に追いかけた「椋平虹」に対する寅彦の答えがここにあった！ という発見の思い入れから……。物事に対する時、古びない寅彦の随筆は、私にとって精神の大黒柱のような存在です。

埼玉 柴崎 大輔

『蓑虫』（「小さな出来事」の中）

寅彦の緻密な観察力と、その表現力ほどの随筆にもちりばめられていて、読者の興味が掻き立てられる。

娘が小学校低学年の頃、色紙の蓑を作らせようと空き箱に細く切った色紙と、裸のみのむしを入れて理科の自由研究をしようとしたことがあったが、どこでそれを教えてもらったのか、このことを当人もすっかり忘れていたようで、私はこの蓑虫の随筆でそのことを真っ先に思い出した。みのむしについて、字引で引いたり歳時記で調べたりと、いかにも寅彦らしいと感心する。

私はみのむしについてもう一つ思い出が

ある。戦時中、何も物資が無くなった折、近所の人がこの蓑を切り開いて、パッチワークのように何枚もつないでいた。きっと丈夫なバックが作れると思う。出来たかどうかは不明である。

高知 澤田 邦子

『レーリー卿 (Lord Rayleigh)』

これはイギリスの物理学者レーリーの伝記である。寅彦はレーリーへの傾倒の気持ちをししばしば語っているが、レーリーを知る人は、2人の学風の相似を指摘する。「自分の楽しみで学問を行った寺田自身が映っている」（戸田盛和）、「彼はレーリーをかりて、日本の科学界に対する鬱憤を洩している」（安倍能成）——などの評言は、この作品の魅力の一斑を解き明かしている。私も、「日本におけるレーリー卿書誌」を編み、2人の学風を偲んだ。

宮城 大森 一彦

『科学者とあたま』

私たちは2014年4月より、オンラインで青空文庫を利用させてもらいオンライン「寅の日」という寺田寅彦の随筆を読む読書会を実施している。オンライン「寅の日」は12日一度巡って来る。2014年12月31日で第85回目を迎えた。そのなかで一番回数多く(4回)読んだのが、この『科学者とあたま』である。それだけお気に入りということだ。

(参照)

<http://homepage3.nifty.com/KUSUDA/KEN KYU/traday/traday-index.html>)

兵庫 楠田 純一

『科学者とあたま』

いくつかの大学で話をする機会があった際に、学生さんたちにこの文章のコピー

を配布して、感想を記してもらったことがあった。

あたまがよいと自負する学生たちが、この文章によって「あたまのよさ」について考えてもらうことができた。多くの学生には初見であったが、この示唆に富む寅彦の文章を読めたことを喜んでもらえた。

ノーベル賞を受賞した青色ダイオードの発明は、寅彦のいう「あたまのよさ」の産物と思います。

神奈川 松尾 宗次

『化物の進化』

古今東西、自然界のふしぎな現象は「化け物」と称され、宗教に神話に学問に芸術に登場してきた。どんなに科学が発達しても、科学で説明できる事はこの世のごく一部に過ぎず、「化け物」は永久に不滅で進化し続ける、いつでもどこにでもいる存在というユビキタス性は、現代の宇宙論でいう「ブラックマター」を予言したものと思う。読むたびに、生きる夢と勇気を与え、開かれた未来を教えてくれる寺田寅彦の随筆は私のバイブルである。

東京 柳澤 逸司

『相対性原理側面観』

昭和 48 年だったかと記憶しているが、何気なしにラジオのスイッチを入れると、愛知揆一大蔵大臣(第 2 次田中角栄改造内閣)が少年の日の思い出を語っていた。

相対性原理の提唱者であるアインシュタイン博士が大正 12 年に来日、仙台で講演後に愛知少年(旧制中学 4 年生)がアインシュタイン博士に挨拶、私も科学者になりたいと話したところ、「あなたは政治家になりなさい」と言われた。その言葉で政治家になることを志したと話していた。

高知 池澤 勝郎

『茶わんの湯』

好きというよりは寅彦ファンとなったきっかけです。

受験物理のラ講などでお世話になった竹内均先生の生の講演を聞き、ぜひとも読んでみたくなり岩波文庫 5 巻で捜したが載ってなく、ある時新書版の全集の中で見つけ初めて読みました。平易な言葉でかかっているのにごまかしがなく身近な茶碗の中の様子が地球全体の現象へとスケールアップする内容に魅かれました。以来 30 年以上科学編を含め、折あるごとに全集を読み返しております。

神奈川 山元 健

『栗の花』(「花物語」の中)

この随筆は、寅彦が熊本の五高の学生であったときに下宿していた家について書いてありますが、実はこの家は私の実家ですので、内容が実際と少し違っているところがあって(この宿の娘が老夫婦の実子ではなく、親類からもらってきた子と書いていますが、実際は老夫婦の一人娘(私の祖母)であることなど)、私はこの作品はむしろ小説に近いのではないかと考えています。しかし、私はこのさびしい家庭を効果的に表現している寅彦の創作が好きです。

熊本 柏木 潤

『花物語』

明治 41 年、30 歳前に書かれた『花物語』が最も好きである。これは晝顔、月見草、栗の花、凌霄花、野薔薇、龍膽花など九つの花を主題にした短編集である。野に咲くあまり目立たない花が選ばれているのがよい。初出のホトトギスで読むと荒削りで意味のとりにくい部分があるが、逆に力強さ、躍動感があつてビビッドに訴えかけてくる。上品で控えめでありながら情熱を秘めた青

春のロマンとある種の倦怠感に満ちているのが素晴らしい。

徳島 四宮 義正

『竜舌蘭』

初雷から雨の竜舌蘭を思い起こし、親類の初節句に参加した遠い記憶を活写している。私が『竜舌蘭』を選んだのは、自分の小さい頃の記憶と重なる部分を随所に感じるからだ。母が客の一人ひとりに挨拶をし、自分はその後ろで小さくなっている…。また、母とともに帰宅せず、一人残った不安。それをはねのけて元気に遊んだことを連想させる数行。そして、ラストの二行に込められた追憶と生へのメッセージに寅彦のやさしさを感じる。

高知 宮 英司

『竜舌蘭』、『初旅』、『東上記』、『嵐』

寺田寅彦は彼の身の回りの生活や社会の各方面にわたり、さまざまな考察を行い随筆を残している。彼は東大の物理学者であり、たくさん論文を発表したと聞いていたので、あまり親近感を持ってないままでいたのであるが、しばらくして彼の父親は幕末の永福寺事件の関係者であったと知り、そうすると坂本龍馬とも口をきいたはず、或いは私の曾祖父とももしかしたら、とか思うと急に身近に感じるようになった。

随筆の中には彼が育った郷土のことを書いたものが少なからずあって読んだ。彼の若かりし頃のできごと、10 から 13 歳の頃明治 14 年頃の姉の嫁ぎ先での初節句でのことを明治 38 年に回想して書いた『竜舌蘭』、明治 26 年に高知から室戸まで一海和尚の墓参りに甥と行ったことを思い出しながら昭和 9 年に書いた『初旅』、明治 32 年熊本五高を卒業後東京に行くことを書いた『東上記』、明治 34 年に肺を病み須崎での

転地療養中のことを明治 39 年に発表した『嵐』などが興味をひく。

これらの中では最後の『嵐』が一番印象に残っています。

高知 田口 保雄

『電車と風呂』

寺田寅彦の随筆はどれも好きだ。中でも「この一作」は『電車と風呂』と題した文章。一読を薦める。視点が実に寅彦らしい。

大正 9 年 5 月の「新小説」に載った。世相を捉える名人寅彦が、電車という文明の利器と銭湯という異空間の民家を対比させ、電車は緊張、銭湯は寛恕を生み、ひいては日本人の文化形成に多大な影響を及ぼすと分析する。

偉大な科学者であり、漱石を師と仰いだ文人でもある寅彦の理と情が織りなす珠玉の作だ。

石川 廣瀬 幸雄

『線香花火』（「備忘録」の中）

幼いころから花火と言えば線香花火と決めつけ、「松葉」「柳」とか言いながら楽しんでいました。しかし、見る人が違うところも表現することができるのかと思うと、小学校理科教育を志した者として事象を見た際の「観察力」及び「表現力」、それも物理的な表現のみでなく、美的描写、音楽的表現等によって語られていることに感動し、そのことがそれ以降の学習・研究を深め、発展させていくことになることを改めて感じさせられています。

高知 山本 健吉

(作品名だけの回答)

『藤の実』

千葉 千葉 照美

「私の好きな寺田寅彦の随筆 ベスト・ワン」について

高知県立文学館 永橋禎子

寅彦没後 80 年にあわせて友の会で企画したアンケート「私の好きな寅彦の随筆」の、皆さまの回答を拝見いたしました。寅彦が亡くなり長い時間が経過しているにもかかわらず、多くの方がアンケートに参加されていて、今でも熱心な読者が寅彦作品を支えているという事実に感動しました。挙げられた作品はどれもそれぞれに魅力があります。自分とはまったく違ったところに眼をとめている感想を見かけると、ついもう一度読み返してみたくになります。寅彦とは何か、を改めて考えさせられる、よい企画であったと思います。

さて、皆さまの感想から感じられるのは、それぞれ住んでいる場所も仕事も生き方も違う、本当に多様な人々が、寅彦の作品に親しんでいるということです。これだけ幅広い読者を獲得できる要因は、まず寅彦の興味の幅が広く、さまざまな分野の随筆を書いているために、読者を受け入れる間口が広いからだと考えられます。

若くして亡くなった美しい妻との思い出をつづった抒情あふれる作品「団栗」、文化や人間心理にまで踏み込んで自然災害の恐ろしさを鋭く考察した「天災と国防」、子ども向けに科学的な物の見方をわかりやすく示した「茶碗の湯」などなど、ここに挙げた作品だけでもその興味の広さは伺えます。寅彦の作品からベストワンを挙げるのは難しい、という会員さんの言葉も納得です。

またそれだけ幅広い分野にわたって書かれているにもかかわらず、どの作品にも寅彦独自のものの考え方や鋭い批評が光っています。アンケートの回答にも、寅彦の思考をなぞって「頭がクリアになる」感じを挙げている方、寅彦の先見の明や物事の本質を突いている点を指摘される方などがいらっしゃいました。

もう一つ、私は、寅彦作品が今でも人を引き付ける要因として、その人間性を挙げたいと思います。

皆さまの感想を読むと、幼少時代の無邪気さ、師弟愛や妻、子どもへの愛、静かな余情と孤独、上品で控えめでありながら情熱が秘められている様子など、多くの方が寅彦の人間性の魅力を語っています。

作品から浮かび上がる寅彦の人となりは、寂しい時に寄り添い、怒っているときに心を穏やかにし、過ぎ去った時代のふるさとの温かみを感じさせ、混乱しているときにはそれを解きほぐす糸口を示すように、何かしら読み手である私たちの心に近いところにあるように感じられます。寅彦が多くの弟子に慕われ、愛されたのと同じように、私たちは作品を読むたびに寅彦その人に出会い、魅了されているのではないのでしょうか。

幸いなことに、寅彦は数多くの随筆を残してくれました。私たちは、今後もその豊かな水脈から尽きぬ清水を汲み上げるように寅彦作品に親しみ、そしてそれを誰か他の人に伝えていくことができます。

高知県立文学館では、この秋、「親愛なる寺田先生 師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展」を開催します。ぜひ皆さまも、随筆を読むように寅彦と中谷宇吉郎の資料を紐解き、その魅力を再発見してみてください。